

多角的にやっぺいこう!

まちづくりにいきなり
100点はあり得ない!



川からまちへ

川とまちをつなげるために

「地元が求めているものをつくる」には、社会実験などの機会に、行政が「やってみたらええやん!」とまずはトライしていくことが大事。最近『MIZUBERING (ミズベリング)』と題し、水辺の活用を国交省とともに活動しており、全国的・世界的な広がりとなっています。水辺とまちをつなぐには、まず「水辺の魅力を知ること」、そこが「人の居場所になるため」のデザインとハード整備が必要。また時間軸を持った考え方で「育て」「広げて」いく。「いきなり100点を目指すのではなく最初は実験的にやっぺいこうことも、まちづくりに欠かせない要素」と嘉名准教授。成功事例だけではなく、これまでと今後の課題についても説明がありました。

- 行政ではできないことを、民間に託してみる。
- さまざまな区界である水辺だからこそ、刺激あって活性化につながることもある。
- 『ミズベリング』で「こうしたいね!」というまちの姿を描いてみる。

「大阪のうまい」を舟ではしごする『水辺バル』。水辺の賑わいがまちへとつながるイベントとして毎年大盛況。熊本の『はしご酒』と同じく、数枚綴りのチケットがポイントで、普段は行かない店にも訪れ、お客にもお店にも利益があるWIN-WINの仕組み。



嘉名先生の講演資料より(一部加工)

第2部 パネルディスカッション

大井手を活かした川まちづくり

つながる中央区

第2部では、嘉名准教授、熊本大学大学院・星野裕司准教授、中央区の萱野晃区長をパネリストにむかえ、現在熊本で行われている水辺とまちづくりの取り組みが紹介されました。また会場からの質問を交え、水辺活性化のヒントが紹介されました。



左から嘉名准教授、星野准教授、萱野区長

[コーディネーター]
田中尚人
(熊本大学政策創造研究教育センター准教授)

Q.(萱野) 行政はきっかけはつくれるが、その後うまくつなげ、広げるには?

➡ A.(嘉名) 「やってみたいを叶えよう」が大切、行政がやり過ぎないことがポイント
インドでは聖なる水辺=ガンジス川でヨガをしている。
大阪の水辺でもヨガをやっている。フェスティバルも開催している。
「風景を豊かにしてくれる水辺の使い方」人がいることでより魅力的になる!

Q.(星野) 空間の大きさによって、そこで行われる活動に違いはあるのか?

➡ A.(嘉名) かつて堺屋太一氏が道頓堀をプールに!と、提案したが「絵にならなかった」
逆に個人の思いでも絵になるならよい、とも言える。

Q.水辺はどうしたら魅力的になる? A.(嘉名)

水辺は境界、区界になっぺいこうることが逆にチャンス!

水辺はマチのしがらみから離れ、やりたい人が集まり自由にやっぺいこう!

マチのルールから外れたりずれたりしているところが面白い!

自由使用が秘策!
偶然に水辺ランチとか?!

前例がないことでも「挑戦」が大切、やっぺいこうみよう!



参考文献: 嘉名光市ら編著「都市を変える水辺アクション 実践ガイド」学芸出版社、2015年10月